

いなかおカ) III



2001 No.139

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅 -XI

下馬部会 斎藤賢一

東南アジアの遺跡を見学するために、前回までは日本人になじみのないヒンドゥー教についてお話ししてきました。今回からは遺跡をとおしてもう一つのインド文化としての仏教についてお話ししたいと思います。以前にお話ししましたように紀元後より仏教とヒンドゥー教（バラモン教）は東南アジアの各国々に浸透してきました。よく調べてみますと仏教とヒンドゥー教は敵対するのではなく、ある国ではそれぞれ歴代の国王の好みによって、またある国では王侯貴族はヒンドゥー教を、民衆は仏教を信仰して共存していた様です。そして土着の宗教（アニミズム）と融合してそれぞれ独特の文化を作っていたのではないかと思います。

仏教の歴史

仏教は紀元前5～6世紀頃、インドの北部、現在のネパール南部にあったカピラヴァストゥに都を置くシャークヤ族の王子として生まれたゴータマ・シッダールタが29歳の時に出家して、苦行、瞑想を繰り返し、35歳のときブッダガヤの菩提樹のもとで悟りを開いて仏陀（悟れる者）となり、その説いた教えであります。悟りを開いた者はすべて仏陀であります、こ

では、ゴータマ・シッダールタのことをブッダと呼ぶことにします。ブッダは生存中には教説を記録したり、体系化したりしませんでした。80歳になってクシナガラで入滅した後に弟子たちによって整理、編集され、教えをまとめた「教」がつくられ、「教」の注釈書である「論」、また仏教徒の守るべき規則「律」もつくられました。「教」、「論」、「律」を三蔵と呼びます。その後弟子たちがおのおの部派をつくり、三蔵を研究してゆくようになります。その結果、実践よりも理論研究を重視するひずみと、僧院主義、出家者中心主義を生み出し、教団が民衆から離れてゆくようになってしまいます。紀元前1世紀頃、こうした部派の存在に批判を抱く仏弟子たちによって改革運動が起こります。彼らは自分たちの教えをマハーヤーナ（大きな乗り物）すなわち大乘仏教と称しました。そしてこれまでの部派の仏教をヒーナヤーナ（小さな乗り物）小乗仏教と呼んで批判しました。大きな乗り物は一般民衆の大勢の人々を乗せて仏教の



写-1



写-2

真理に至ることが出来るのに対し、小さな乗り物は、修行者が自分だけしか真理に至ることが出来ないということです。部派仏教は大乗仏教側の批判に応じて、実践面では戒律厳守を打ち出すなどの特色を生かす様に努めました。そして、大乗仏教側が小乗仏教と称したのに対し、上座部仏教と呼びました。その意味はブッダの死後教えをまとめるためたびたび仏教会議（結集）が行われ、部派仏教の人々は上座に座っていたからです。紀元前3世紀頃インドの最初の統一国家マウリヤ王朝を築いたチャンドラグプタ王の第3代アショカ王が仏教徒となってインド全域に仏教が広がりました。アショカ王は仏教を政治理念として治世を行ったばかりではなく、仏教を広めるためにインドのみにとどまらず、スリランカにマヒンダ長老を遣わしました。そしてスリランカから仏教は海のシルクロードを通して東南アジアの国々に伝播しました（南伝仏教）。またインドからヒマラヤを越えてシルクロードを通して中央アジア、中国、朝鮮、日本に伝わりました（北伝仏教）。大乗仏教は旧来の内容とは異なる教典がおびただしく生まれました。それらの教典はブッダが語った言葉として記されていても、その時代の修行者が心の中で聞いたブッダの言葉であり、もはや原始教典のようにブッダの言葉を忠実に伝えるものではありませんでした。そしてその中でブッダは一人の人間から永遠の真理へと高められていきました。一方上座部仏教はますます原始教典に近づいて行きました。4世紀になるとグプタ朝がおこりバラモン思想が再び有力となり、仏教も影響を受けました。この頃の仏教学者のほ



写-3

とんどはバラモンの出身であり、バラモンの教養を身につけた上で、サンスクリット語を用いて仏教を論じました（以前はパーリー語）。そしてこれまでとは違った大乗教典が出現し、8世紀になるとヒンドゥー教の影響を強く受けた密教が出現します。

仏教寺院の構造

仏教の宇宙観もヒンドゥー教の宇宙観も非常に良く似ておりその宇宙観を表現したものが建築でありますので建物の形も良く似ています。内部にはリングアや神像の代わりに仏像が祀られています。仏教寺院の特徴としましてはヴィハーラ（僧院）があります。仏教の展開過程の最初に登場した建築であり、人間が住むところでありますので広い内部空間、間仕切り、窓などがあります。出家して僧となったものが、集団をつくって修行するというののないヒンドゥー



写-4



写-5

一教ではこのような機能の建築はありません。もう一つの特徴はストゥーパ（卒塔婆、塔）です。起源は墳墓として築かれた土饅頭であり塚あるいは墳丘のようなものです。そして内部に胎藏物（骨、髪、歯、教典など）が入っています。従ってそれ自体が礼拝供養の対象です。現存している最も古いストゥーパはインドのサーンチャーにありおよそ2千年前に建立されたものです（写-1）。これが日本では三重塔、五重塔になりました。建物の壁面を飾る彫刻の題材はブッダの生涯すなわち仏伝図です。特に誕生の場面、出家の場面、悟りを開いた場面、初めての説法の場面、入滅の場面が好まれて彫刻されます。もう一つの題材はブッダの前世における善行を表した本生話—ジャータカです。ブッダは前世において菩薩、人間、動物などに生まれ変わり、数々の善行を行った場面彫刻がされています。このジャータカにはインドのあらゆる説話、寓話、おとぎ話などが500以上収録され、わが国の「今昔物語」「宇治捨遣物語」などに撰取されました。

そのほかの彫刻としては、ヒンドゥー教でお話した獅子—シンハ、マカラ、鬼面—カーラ、蛇—ナーガ、門衛—ドゥバラバーラ、天女—アプサラ、キンナラ、花瓶、聖樹などがヒンドゥー教と共通のモチーフとして用いられています。仏教寺院見学でも彫刻が一番おもしろく、とても重要です。

仏像

初期の仏教教団では、ブッダの姿が絵や彫刻で表されることはありませんでした。物質的な

形や現象を越えたブッダ像をつくることは純粹な信仰を失うことにつながると考えられブッダを表すときは、法輪、菩提樹、仏足、王座、傘蓋などを用いておりました（写-2）。ブッダの姿が具体的に表現されるようになったのは、紀元前1世紀頃からギリシャ、ローマ文化が流入して神像彫刻の影響を受けてからで、2世紀頃にアフガニスタン東部のガンダーラ地方と、西インドのマトゥラーでほぼ同時代に仏像がつくられた様です。祀られている仏像をみればその時代にどんな仏教が流行っていたかわかります。ブッダであれば上座部仏教、菩薩であれば大乘仏教、大日如来なら密教です。

東南アジアへの伝播

スリランカに伝わった仏教はミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、さらにはマレーシア、インドネシアに伝わりました（写-3、4）。



写-7



写-6



写-8

現在マレーシア、インドネシアには仏教徒はほとんどいなく、イスラム教が主流を占めておりますが、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアはまさに上座部仏教の国です。私たちが東南アジアで見る遺跡は7世紀以降のもので、それ以前は木造で作られていたため現存しません。最も古い遺跡はミャンマーのシュリ・クシェトラ遺跡です(写-5)。ミャンマーにはエーヤワディー川中域のバガンに11世紀から13世紀のバガン王朝時代に建立された大仏教遺跡群があり、当時は寺院やストゥーパが5千以上もあり、現在でも8百以上残っています(写-6)。タイにはスコタイを中心にシーサッチャナーライ、カンペンペットに13~14世紀の遺跡群があり、この地はタイ民族によって建国された最初の王国があったところです(写-7)。また南には次の王国アユタヤ遺跡があります。カンボジアにはアンコールワットで有名なアンコールの都にバイヨン寺院を中心とした壮大な仏教遺跡が残っています(写-8、9)。ベトナムには中部に現在はほとんど残っておりませんが東



写-9

南アジア最大といわれたドン・ジュオン寺院がありました。そしてインドネシアにはかの有名なボロブドゥール遺跡があり、またその周囲にはヒンドゥー寺院と共存して8~10世紀の仏教遺跡群があります(写-10、11)。これらの国を訪れることによって私たちが知っている日本の仏教と東南アジアの国々に生きている仏教のあまりの違いに驚かれるでしょう。次回からは実際に仏教遺跡を見てみたいと思います。最後に私の好きなブツダの言葉を載せておきます。

足るを知り、法を聞き、法を見る者の独居は楽しい。世の人々に対していかり、にくむことなく、すべての生きものに対して自制することは楽しい。世間に対する貪欲を離れもろもろの欲望を越えることは楽しい。「おのれが」という慢心に打ち克つことは、けだし最上の楽しみである。



写-10



写-11